

39

香月牛山の処方に関する研究

星野 卓之, 小曾戸 洋, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【緒言】 香月牛山(1656-1740)は三十歳からの十四年間、豊前中津侯小笠原氏の侍医をつとめたのち、京都で臨床や著述に活躍し、晩年の小倉時代までに多数の著書を残した。また没後にはおのおの性格を異にする一門秘伝の臨床医書が出版され、その処方運用法が多面的に残されている点で興味深い。

【方法】 病証単位の治療書である『牛山活套』(元禄十二年(1699)自序, 安永八年(1779)刊)、後世方の活用をまとめた処方集の『牛山方考』(元禄十二年自序, 天明二年(1782)刊)、及び難治症例集の『遊豊司命録』(明和六年(1765)刊)を比較検討した。

【結果】 『牛山活套』は初学者向けの治療指針であるが、『遊豊司命録』の応用的な病証分析に通ずる内容を含んでいる。ただし多くは後世方の優秀処方(附方含む)と『万病回春』方を用いる指示がされている。また必須参考書として、補中益気湯や眼病の項で李東垣の『弁惑論』『脾胃論』『蘭室秘蔵』、痘疹の項で『保赤全書』『痘疹全書』『活幼心法』を挙げている

『牛山方考』は『万病回春』からの引用はほとんどなく、それ以前の医籍を出典とする後世方加減の流儀をまとめ、処方名の異なる附方も網羅している。『衆方規矩』などから選択されたとみられる証候対応の単純な加減に続いて、口訣調の加減方を指示する箇条書きの文章があり、ここに「啓益」と頭書した按文や秘匿度の表現が付記される。附方名は幅広い出典からとられており、独自のものとしては『雪潭居医約』がある。

『遊豊司命録』は他医により壊証に陥った難治例を多く取り上げている。誤治の内容に加え、脈診を主体とする臨床所見とそこから導かれる最終診断、処方とその投薬期間について順を追って詳細に記載されている。その処方は加減に富み、『牛山方考』に載せる加減と完全に一致するものは少ないが、最終処方として調理に用いた六君子湯加減・補中益気湯加減については症例間で共通性がみられた。

【考察】 香月牛山一門の基本書籍である『牛山活套』『牛山方考』には『万病回春』を併用して用いる編纂意図があった。処方運用についてはさらに『遊豊司命録』から学ぶ指示があり、実際には症例ごとに自由に加減を組み合わせる方針がとられたものと考えられる。

その他の香月牛山による医書では、今回検討した書籍と共通する症例を簡略化して取り上げる『葉籠本草』が、臨床医学的本草書としてさらなる加減方の分析に役立つと考えられる。ここには膨大な中国医家からの引用がコンパクトにまとめられ、また一般啓蒙書として著された養生三部作にも原典として中国書籍が多数取り上げられていることから、香月牛山は日本医家の影響を受けつつも、独自に中国医書から知識を吸収したうえで自在な処方運用を行ったものとみられる。

一般に後世方派は多彩な加減方を用いる特徴があり、その法則性を読み解くことは困難である。しかし香月牛山については初学から応用まで多段階の処方運用を示した医書が残されており、さらなる他の医家との比較から、その独創的な処方運用法を明らかにできる可能性がある。ただし実際の症例に対する融通無碍な処方を解説するには、生薬・処方・病証に関する総合的理解と個々の病態の変化を勘定に入れる必要があろう。

【結論】 香月牛山の臨床医書間の比較から、その一門に伝えられた処方運用法の一端を明らかにした。